

飛鳥資料館のみどころ(14)

展示品解説 その6

「あすかの今昔」

この春、飛鳥資料館のエントランス展示が大幅にリニューアルしました。「あすかの今昔」と題した新展示。「あすか」の現代と飛鳥時代の対比を実感できる、大胆な配置が魅力です。展示コーナーではキトラ古墳から大官大寺にかけての1/500の航空写真を床面に敷き、古代飛鳥の中心部に同スケールの飛鳥京復原模型を置きました。奥の壁面には大和三山を背景とした飛鳥のパノラマ写真があります。いわば、現代の景観から古代の飛鳥を浮かび上がらせたような展示。時代の対比と連続性を実感していただければと思います。

この展示の中心をなす模型は、古代飛鳥の中枢部を、東西900m×南北1650mにわたって復原したものです。南側には橘寺、川原寺の伽藍が見え、その東には天武天皇の飛鳥浄御原宮があります。ほぼ中央には蘇我氏が建立した飛鳥寺の一塔三金堂の伽藍、その西側には石敷の槻木広場が広がります。北側には水落遺跡の漏刻台が建ち、石神遺跡には斉明天皇の迎賓館の建物が並びます。飛鳥

時代から奈良時代にかけて、飛鳥地域に展開した宮殿や建物などのさまざまな施設が一望できます。

この模型は、「飛鳥・藤原京展」の際に、発掘調査の成果に基づいて製作されました。模型の製作から早5年。飛鳥の発掘は現在進行形で、日々新たな発見があります。そこで、この模型は新たな発掘成果を反映させた改造を適宜加えながら「進化する模型」としていきたいと考えています。今回、常設展に展示するにあたっては、近年の発掘成果をもとに、川原寺の北面大垣の位置や、経楼と鐘楼の構造などを変更しました。今後も、発掘調査の新知見を、わかりやすくお見せしていきたいと思っています。 (飛鳥資料館 西田 紀子)



大勢の見学者でにぎわう 展示コーナー